

フランス語不定名詞句主語に否定が及ぶ事例

西村 香奈絵

French Indefinites in the Subject Position
Falling Under the Scope of Negation

Kanae NISHIMURA

This article addresses French subject indefinites in certain contexts in which they are interpreted inside the scope of negation. When appearing in the subject position, indefinites usually escape from the scope of negation. However, there are contexts which allow negation to assume scope over indefinites in the subject position: these include conditionals, interrogatives, complements of predicates of a certain type expressing surprise, and complements of phrases such as *le fait que* 'the fact that'. The same phenomenon can also be observed in English and Japanese. In this article, we propose the hypothesis that a complementizer carrying a purely formal trait, [unvalued neg], serves to extend the scope of negation in these cases.

キーワード：① 不定名詞句 ② 主語位置 ③ 否定の作用域 ④ フランス語 ⑤ 補文標識

1. はじめに

フランス語には、可算名詞に付加される不定冠詞として、単数不定冠詞の *un(e)* と、複数不定冠詞 *des* がある。これに加えて、非可算名詞に付加される *du (de la, de l')* がある。これらの不定冠詞を付された名詞句を、不定名詞句と呼ぶ。不定名詞句は、否定文の主語として現れる場合、否定の作用域の外に出る解釈を得る。例えば(1)aは、不定名詞句主語 *des étudiants* (学生) に否定が及ぶ解釈は持たないので、(1)bで書き換えられる意味は持たない。この文が容認されるのは、(1)cのような「(文脈で与えられるある学生の集合の中で) 来なかった学生が一部いる」という部分解釈を持つ時に限られる。(1)bのように、主語を含んだ命題全体に否定が及ぶ否定を命題否定、主語に否定が及ばず述語だけが否定される否定を述語否定と呼ぶ。

(1) a. *Des étudiants ne sont pas venus.*

「学生が来なかった」

b. ≠ *Il n'y a pas d'étudiants qui soient venus.* [命題否定]

「来た学生がいない」

c. = *Il y a certains étudiants qui ne sont pas venus.* [述語否定]

「来なかった学生がいる」

しかし、実際の使用状況を観察すると、ある特定の環境に置かれると、主語不定名詞句にも否定の作用域が及ぶ命題否定の解釈が可能になることが分かった。

(2) *On peut alors voir apparaître si des précautions ne sont pas prises, deux ordres de complications¹⁾.*

「もし予防的措置がとられなければ、2種類の合併症が現れるのを観察すること

になるかもしれない」

これらの文で、不定名詞句主語に否定が及ぶことは、否定の存在文や主語名詞句に *aucun* (どんな〜も(ない)) を付して書き換えられることにより確かめられる。

- (3) (2) = *si aucune précaution n'est prise ...*
 「もしどんな予防的措置もとられなければ」

否定が主語に及ばない述語否定の解釈が可能だとすると、(1)c でみたように、「ある予防的措置のうちとられなかった予防的措置があれば」という部分解釈が出ることになるが、(2)にはこの解釈はなく、命題否定の解釈になる。

ところが、このような不定名詞句主語に否定が拡張される現象はこれまでわずかに言及されるにとどまっておき (Attal 1979, 1994, Muller 1984, 1991)、まとまった観察はなされていないように思われる。さらに、不定冠詞が付された名詞句に限らず、*quelqu'un* (誰か)、*quelque chose* (何か) などの不定名詞句主語についても、主語位置で拡張された否定作用域に入る現象の研究は、Larrivée (2005)を除いてほとんどない。そこで、本稿では次の2点を目標とする。

(i) フランス語不定名詞句主語に否定が及ぶ例外的事例を報告し、これらの事例は、条件文の前件、疑問文・間接疑問文、驚きを表す述語のとり補文と、*le fait que...* 節 (*the fact that ...*) において観察されることを示す。

(ii) 日本語や英語のデータとの比較から、否定極性文脈を作る節を中心とした特定の節内において「否定作用域拡張」現象が観察されることを指摘する。これに基づき、否定の作用域を広げる働きを持つ補文標識が存在すると仮定し、分析案を提示する。

2. 不定名詞句を主語に持つ命題否定文が観察される環境²⁾

2.1. 条件を表す *si* (もし) 節内において

条件を表す *si* 節内の否定文では、不定名詞句主語に及ぶ命題否定解釈が可能になる。次の文はいずれも、それぞれ *b* で示されているように非存在文で書き換えられる。(4)は反事実条件文で、(5)は通常の条件文である。

- (4) a. *Cette avant-garde fondrait, si de perpétuels renforts ne la reconstituaient, montés de l'arrière, issus de la masse*³⁾.

「この前衛部隊は、もし絶え間ない加勢が後方より大群で押し寄せ、建てなおしてくれなければ、崩れてしまうだろう。」

- b. ... *s'il n'y avait pas de perpétuels reforts qui la reconstituent.*

「それ (= 前衛部隊) を立て直す絶え間ない加勢がなければ…」

- (5) a. *La commission propose d'organiser une campagne nationale de dépistage, de rénover dans l'urgence les logements à risques et de supprimer les aides au logement destinées aux propriétaires si des travaux ne sont pas engagés*⁴⁾.

「その審議会は、国を挙げての診断キャンペーンを組織し、危険住居を緊急に改修し、もし工事が開始されなければ、所有者に向けて与えられている住居補助を取り消すことを提案する」

- b. ... *s'il n'y a pas de travaux qui soient engagés.*

「開始されている工事がなければ…」

2.2. 間接疑問を表す *si* 節、疑問文において

不定名詞句主語を含む文全体に否定作用域が拡張される現象は、間接疑問を導く *si* 節や疑問文においても可能である。いずれも、*b* で示されるように、命題全体を否定の作用域にとる存在否定文で書き換えられる。

- (6) a. ..., et l'on en est à se demander s'il s'agit de ce seul lycée et si de graves lacunes de l'enseignement actuel de la morale ne sont pas révélées par un événement qui deviendrait alors un signe avertisseur ...⁵⁾.

「これがこの高校だけの問題であるのか、現教育のモラルの重大な欠落が、警告となるような出来事によって明らかにされているのではないかと自問する必要がある。」

b. ... l'on en est à se demander s'il n'y a pas de graves lacunes de l'enseignement actuel de la morale qui soient révélées.

「…明らかにされる現教育のモラルの重大な欠落がないだろうかと自問する必要がある」

- (7) a. ... : les élèves semblent connaître les réponses aux questions posées dès la première évaluation. On se demande si des informations ne sont pas données sur Internet⁶⁾.

「…生徒たちは、試験の最初から、尋ねられた質問への答えを分かっているように見える。情報がインターネット上で流されていないだろうかと疑われる」

b. On se demande s'il n'y a pas d'informations qui soient données sur Internet.

「インターネット上で流されている情報がないだろうかと疑われる」

- (8) a. Des flammes joyeuses ne dansaient-elles pas dans ses yeux ?⁷⁾

「喜びの炎がその両目に踊っていないかただろうか」

b. N'y avait-il pas de flammes joyeuses qui dansent dans ses yeux?

「その両目に踊る喜びの炎がなかっただろうか」

2. 3. le fait que 節 (the fact that 節)

le fait que 節内でも、不定名詞句主語は否定の作用域に入る解釈を持つことが観察される。(9)について Attal(1994)は、le fait que に埋め込まれなければ des N 否定文は不自然で容認されないが、le fait que に埋め込まれると容認されるようになると述べている。

- (9) Le fait que des enfants ne réussissent pas à se nourrir ... (Attal 1994 : 227)

「子どもたちが食べ物を摂取できていないという事実は…」

- (10) Ces non-réponses traduisent peut-être le fait que des écrits scientifiques ne sont pas mis à la disposition de ces enfants-là.⁸⁾

「これらの無回答は、おそらく科学的書物がこの子ども達の手元にないという事実を示している」

= le fait qu'il n'y a pas d'écrits scientifiques qui soient mis à la disposition de ces enfants-là

「この子どもたちの手元にある科学的書物がないという事実」

2. 4. まとめ

不定名詞句を主語に持つ否定文には、次のような文脈において命題否定が可能になる⁹⁾。

- (11) (i) 条件文前件
(ii) 間接疑問を表す si 節、疑問文
(iii) le fait que 節

以上のような場合に、否定作用域が拡張されるのは、不定冠詞が付された不定名詞句だけではない。quelqu'un (誰か), quelque chose (何か) を主語に持つ否定文でも否定作用域の拡張が報告されている (Larrivée 2005, Attal 1979, 1994, Muller 1984, 1991)。また、英語や日本語においても類似した現象が観察される (Baker 1970, Laka 1990, Hasegawa 1991, 今仁 1993, Kato

2000, Horn 2001, 上林 2008 等)。次節では、否定文の主語で用いられる *quelqu'un* が否定される例を挙げ、それに対する Larrivée (2005) の分析を検討する。

3. *quelqu'un* と否定文

3. 1. *quelqu'un* / *quelque chose*

quelqu'un (誰か), *quelque chose* (何か) は、典型的には肯定文でのみ用いられる。否定文に現れることもあるが、その場合にも否定の作用域の外で解釈される¹⁰⁾。

- (12) a. Je n'ai pas vu *quelqu'un*.
= Il y a *quelqu'un* que je n'ai pas vu.
(Muller 1991 :337)
「私は誰かに会わなかった」
= 「私が会わなかったような誰かがいる」
- b. *Quelqu'un* n'est pas venu. (Muller 1991:102)
= Il y a *quelqu'un* qui ne soit pas venu.
「誰かが来なかった」
= 「来なかったような誰かがいる」

しかし、3.2 節で見ると、不定名詞句主語に命題否定が可能になるのと同じ文脈において、*quelqu'un*, *quelque chose* にも否定が及ぶ解釈が可能になる。

3. 2. *quelqu'un* / *quelque chose* に否定が及ぶ事例

以下で示されるように、条件文前件の *si* 節、疑問節・疑問文、驚きを表す補文、*le fait que* 節内において¹¹⁾、通常は否定の作用域から出る *quelqu'un* や *quelque chose* に、否定の作用域内に入る解釈が可能である。

- (13) 条件文前件の *si* 節内
On n'en est pas content, si *quelqu'un* ne le sait. (Molière, *L'École des femmes*. Banque Biblionet, in Larrivée 2005 :

285)
「誰かそれを知ってくれないなら、満足ではない」

(14) 疑問節・疑問文内

a. Pourquoi *quelqu'un* ne m'a-t-il pas percé par devant d'une épée à deux tranchants? Malheureux que je suis!
(http://www.mithorama.com/_mythes/indexfr.php?tid=981) (Larrivée 2005 : 284)

「なぜ誰か私を前からろ刃の剣で突き刺してくれなかったのだ。私はなんと不幸なことか！」

b. Dites-nous pourquoi *quelqu'un* n'est pas venu? (Larrivée 2005 : 285)
「なぜ誰かこなかったのか我々に話して下さい」

c. Je me demande si Max n'a pas fait *quelque chose* à la voiture.
(= Je me demande si Max n'a rien fait à la voiture.) (Muller 1984 : 86, Muller 1991 : 337)
「私はマックスが車に何かしなかったかと疑っている (= 私はマックスが車に何もしなかったか疑っている)」

- (15) 驚きを表す補文 : Ça m'étonnerait que ...
Ça m'étonnerait que Luc n'ait pas vu *quelqu'un*.
(= Ça m'étonnerait que Luc n'ait vu psersonne.) (Muller 1984 : 86, 1991 : 337)
「リュックが誰かに会わなかったとは驚きだ (= リュックが誰にも会わなかったとは驚きだ)」

(16) *le fait que* 節

a. Le fait que *quelqu'un* ne soit pas venu s'explique facilement. (= que

personne ne soit venu) (Attal 1979, in Muller 1984 : 86, 1991 : 338)

「誰か来なかったという事実は、容易に説明がつく」

b. Le fait que quelque chose ne se produit pas revient alors non pas à dénoter un état de choses dans lequel ... (L.de Saussure. 1998. Le temps dans les énoncés négatifs. In J. Moeschler (dir.). *Le temps des événements*. Paris : Kimé, pp. 272-280.) (Larrivée 2005 : 285)
「何かが起こらないことは、…のような事態を再び表すことにはならない」

驚きを表す節内では、des N 主語文にも命題否定の解釈が可能になるようである。(17)a では、Je suis surprise que 節 (I am surprised that 節)の中では、des N 主語は否定作用域の中に入る解釈が可能で「手続きがない」と解釈できるが、(17)bのような単文や je sais que (I know that)に埋め込まれる場合には、「手続き」が否定の作用域の外に出る解釈、例えば「準備するのを忘れていた手続きがある」という解釈になるという¹²⁾。

(17) a. Je suis surprise que des procédures ne soient pas prévues.

(= Je suis surprise qu'aucune procédure ne soit prévue.)

「私は手続きが準備されていないことに驚いている (=私は何の手続きも準備されないことに驚いている)」

b. (Je sais que) des procédures ne sont pas prévues. (= Aucune procédure n'est prévue.)

「手続きが準備されていない(ことを私は知っている)(何の手続きも準備されてない)」

3. 3. L'arrivée 2005 の分析

否定の作用域に通常は入らない主語 quelqu'un に否定が及ぶ現象を扱った研究に Larrivée (2005)がある。Larrivée は、「quelqu'un ... ne pas...」の語順で現れる否定文において、否定が quelqu'un に及ぶ解釈を持つ場合を、4タイプに分類し、(19)のような分析案を提案した。

(18) a. 反論的否定(Négation polémique : Ducrot 1973¹³⁾)

b. 反語的疑問文、反事実条件など ((13), (14) a, b)

c. モーダル(注 11 を参照)

d. le fait que ... ((16) b, c)

(19) 分析

主語 quelqu'un が否定の作用域に入る解釈は、述語で述べられることが実現しなかったことと、その実現が期待されていたこととの「対比」がある時のみ可能になる。この対比により命題全体が否定の対象となる。

しかし、この分析には問題点がいくつか指摘できる。第一に、Larrivée は、単文でも、「対比」があれば、主語不定名詞句に否定作用域は拡張できると述べているが¹⁴⁾、それは否定がメタ言語否定の場合のみである。Larrivée が単文でも否定作用域拡張が見られる例として挙げているものは次のようなものであり、いずれもメタ言語否定である。

(20) a. - *Quelqu'un est-il venu?*

- Non, quelqu'un n'est pas venu.

(Larrivée 2005 : 284)

「だれか来た?」

「いいえ、誰か来ていません」

b. Eh! bien, ou bien quelqu'un est venu, ou bien quelqu'un n'est pas venu. (*Idem.* : 284)

「ああ、誰かがきたか、誰かが来なかつ

ただ」

c. Quelqu'un n'avait pas été froissé, mais outragé. (*Idem.*: 287)

「誰かが気を悪くしたのではない、侮辱されたのだ」

(20)a, b は、直前に発せられる *quelqu'un* 主語文をそのまま繰り返した形でメタ的に否定がかかっており、また(20)c は「傷つけられたというようなものではなく、侮辱されたのだ」という言語使用についてメタ的に否定がかかっている。それに対して、条件を表す *si* 節、疑問文(節)、驚きを表す述語の補文内、*le fait que* といった環境で否定作用域の拡張現象が見られる場合には、メタ言語否定である必要はない。メタ言語否定は、発音や言語使用、前提など論理的否定では否定対象とならないものも含み、あらゆるものを否定対象とできるので、メタ言語否定の例は、否定作用域拡張の事例と見なすべきではない。

第二に、対応する肯定文で表される命題への期待と、否定文で表される事態との「対比」という文脈に依存した分析をしているが、否定作用域の拡張は、特定の統語環境にも依存して可能になるのであるから、文脈の働きのみでは説明できない。

第三に、「対比」は、否定文であれば多かれ少なかれ生じるはずであり、*L'arrivée* のいう「対比」はどんな場合に生じて、どんな場合に生じないのか、制限できなければならないが、それが不十分であると思われる。

本稿では、否定作用域拡大の原因は、条件文前件や疑問文、驚きを表す節が形成する否定極性文脈にあると考え、分析案を提案する。

4. 否定極性文脈と否定作用域の拡張

4.1. 否定極性

条件文の前件、疑問文、間接疑問文、驚きを表す述語の補文は、否定極性文脈という特徴を共有する。極性(*polarité*)とは、次のように含意関係が逆転する性質を指す。肯定極性を持つ

文脈では、単調上方(*monotone croissant*)に含意が成り立ち、否定極性を持つ文脈では、単調減少(*monotone décroissant*)に含意が成り立つ。否定極性文脈には、否定文だけでなく、条件節、疑問文なども含まれる。

(21) Paul → un garçon

ポール 1人の男の子

[肯定極性文脈]

a. J'ai vu Paul. → J'ai vu un garçon.

「私はポールに会った」「私は1人の男の子に会った」

[否定極性文脈]

b. Je n'ai pas vu Paul. ← Je n'ai pas vu de garçon.

「私はポールに会わなかった」「私は男の子に会わなかった」

c. Si je vois Paul, je te dirai. ← Si je vois un garçon, je te dirai.

「ポールに会えば、あなたに言います」
「1人の男の子に会えば、あなたに言います」

このような特性を持つ否定極性文脈では、否定極性項目の使用が認可される。(22)a, b で示されるように、*qui que ce soit* (誰であろうと)には否定極性項目としての用法があり、否定極性文脈で用いられて「誰か、誰も」という *quelqu'un* の否定に対応する意味を表す。(22)c では、否定文であっても主語位置は否定の作用域の外に出るので、*qui que ce soit* は認可されない。しかし、(22)d が示すように、主語位置にあっても、否定された述語がとる補文の中では認可される。

(22) 否定極性文脈内と否定極性項目

a. Il n'est pas venu qui que ce soit.

(L'arrivée 2006)

「誰も来なかった」

b. *Il est venu qui que ce soit.

(L'arrivée 2006)

「誰であろうと来た」

c. *Qui que ce soit n'est pas venu.
(L'arrivée 2006)

「誰であろうと来なかった」

d. *Je ne crois pas que qui que ce soit ose affirmer le contraire*¹⁵⁾.

「私は誰であろうと、その反対をあえて断言するとは思わない」

否定極性項目には、この qui que ce soit の他に jamais (決して (~ない)), le petit doigt (少しも) 等がある。否定極性項目は、条件を表す si 節、間接疑問の si 節、疑問文、ça m'étonnerait que 節に現れ、これらの環境が否定極性文脈であることを示す。ただし、(26) が示すように、le fait que 節では、否定極性項目を認可せず、否定極性文脈を形成しない。

(23) [条件文前件]

a. Si tu vois qui que ce soit, dis-le-moi.
「もし君が何であろうと見たなら、私に言ってちょうだい」

c. S'il venait jamais nous voir,
(Muller 1984: 94)
「もし彼が万が一私たちに会いに来てくれるなら…」

(24) [間接・直接疑問]

a. ... Strawson, qui, fort sceptique à l'égard de la thérapie wittgensteinienne, se demande si qui que ce soit, à part lui, a soutenu pareille position¹⁶⁾.
「ストローソンは、ウィトゲンシュタイン的治療法に関してとても疑い深く、誰であれ彼以外に類似した見解をとったのではないかと疑っている」

b. *Est-ce que qui que ce soit nie celà?*¹⁷⁾
「誰であろうとそれを否定するだろうか」

(25) [驚きを表す節]

a. *Ça m'étonnerait que qui que ce soit dise que ça a été facile.*¹⁸⁾

「誰であれ簡単だったと言うなんてありえない」

b. *Ça m'étonnerait qu'il vienne jamais nous voir.* (Muller 1991: 69)

「いつか彼が私たちに会いに来るなんてあり得ない」

(26) ?? *Le fait que quelqu'un ait levé le petit doigt pour aider sa sœur (n')est (pas) étonnant.* (L'arrivée 2005: 286)

「誰かが自分の姉妹を助けるために指一つ動かすという事実は、驚きだ・驚きではない」

以上から、quelqu'un / quelque chose 主語に否定作用域が拡張するのを許す環境のうち le fait que 節を除くもの、すなわち条件を表す si 節、疑問を表す補文、驚きを表す述語の補文は、否定極性文脈を形成することが分かった。

4. 2. 日本語と英語における否定作用域の拡張

4. 2. 1. 英語の場合

日本語や英語でも、同様の文脈において、単文では否定の作用域に入らない不定名詞句主語にまで、否定の作用域が拡張される解釈が可能である。英語の someone は肯定極性項目として知られており、quelqu'un と同様、通常否定文では用いられない。

(27) a. *John didn't say something.

b. John didn't say anything.

(28) a) において、someone が否定の作用域内に入らないのは言うまでもないが、(28) b) のように anyone も否定の作用域に入らず認可されない。主語位置は否定の作用域に入らないためである。

(28) a. Someone didn't say that.

b. *Anyone didn't say that.

しかし、否定極性文脈を作る反意的述語の補文

内では、否定作用域は someone 主語にまで拡張される。

- (29) a. I'm surprised that *someone* hasn't *already* said *something*. (Baker 1970: 182)
 b. John is relieved that *someone* didn't sign up ahead of him. (*Ibid.*)
 c. # {I'm convinced / I know} that *someone* hasn't *already* said *something* to you. (Horn 2001 :495) (強調は執筆者)

4.2.2. 日本語の場合

日本語では、否定以外の否定極性文脈では、否定極性項目が認可されない。これにより、日本語では一般的な否定極性現象とは無関係であるように一見思われる。

- (30) a. ?* 困っているとき指一本動かすと、感謝される。
 b. ?* ろくな人が来ましたか？
 c. ?* ろくな人が来ることを否定した。

しかし、否定極性項目は認可されなくても、否定極性文脈内において否定作用域が拡大するという現象は観察される。(31)aは、「来た専門家が誰もいない」という命題否定の解釈で自然な文であるが、単文で「専門家が誰か来ない」が現れた場合にはこの解釈では容認されない。また(31)bでは、単文では「ほとんど」が否定より広い作用域をとる解釈しかないが、(31)cのように条件節に入れると、否定の方が広い作用域をとり命題否定の解釈が可能になる。

- (31) [条件文前件]
 a. 専門家が誰か来ないと、お手上げだ。
 (cf. ?? 専門家が誰か来ない。)
 (Hasegawa: 1991)
 b. 委員のほとんどが来ない。
 (今仁 :1999)
 (i) ほとんど > ない : 来ないのが、ほ

とんどの委員だ。

(ii) ?* ない > ほとんど : ほとんどの委員が来るわけではない。

c. 委員のほとんどが来なかったら、決議できない。(今仁 :1999)

(i) ほとんど > ない : 来ないのがほとんどの委員なら、決議できない。

→ 来る委員が 1/2 なら、決議できる。

(ii) ない > ほとんど : ほとんどの委員が来るのであれば、決議できない。

→ 来る委員が 1/2 なら、決議できない。

(32)において、平叙文「ジョンも来なかった」では「も」の方が否定より広い作用域をとる解釈(i)しかないのに対して、疑問文に入れると、否定が広い作用域をとる命題否定が可能になることが示される。(33)でも同様に、反意的述語の補文内でのみ、命題否定解釈が出ることが分かる。

(32) [疑問文]

ジョンも来なかったか？ (Kato 2000)

(i) も > ない : 他の人も含めジョンも来なかったか？

(ii) ない > も : 他の人に加えて、ジョンも来る、というのでないか？

(33) [反意的述語] (上林 2008)

a. 先生は太郎も来なかったのを {喜んだ / 確認した / 納得した}。(解釈(ii)は困難)

b. 先生は太郎も学校に来なかったのを {悲しんだ / 疑問に思った / 驚いた}。(解釈(ii)が可能)

(i) も > ない : 他の人も含め太郎も来なかったことを~した。

(ii) ない > も : 他の人に加えて、太郎も来る、というのでないことを~した。

4.3. 節の極性を左右する素性

4.3.1. 否定極性文脈を作る補文標識

否定極性項目を認可する素性として[neg]素性を仮定すると、この[neg]は、動詞ではなく、動詞が選択する補文標識(complementizer)にあると考えられる (Laka 1990, Kato 2000 等)。例えば、(34)に示されるように、節境界を挟まなければ否定極性項目は認可されないことから裏付けられる。

- (34) a. *John {denied / doubted / gets surprised at} anything.
 b. John {denied / doubted / gets surprised} that Mary saw anything.

英語と同様のことは、フランス語にも当てはまる。qui que ce soit (誰であろうとも)には、(i) n'importe qui (誰であろうと)と(ii) quelqu'un (誰か)で書き換えられる二つの意味があるが、補文標識を挟まなければ(i)の解釈しかなく、否定極性項目として持つ意味(ii)は、補文標識を介さなければ許されない。

- (35) a. Il refuse qui que ce soit. (cf. Muller 1991: 95)
 (i) [自由選択] 彼は誰であろうと全員拒否する。
 *(ii) [否定極性項目] 彼は{何かを / 何も}拒否する。
 b. Je refuse que qui que ce soit me dérange.
 (i) 私は、誰であろうと全員が私の邪魔をするのを拒否する。
 (ii) 私は、{誰かが / 誰も}私の邪魔をするのを拒否する。
 c. *Luc doute jamais de quoi que ce soit.
 「リュックは何であろうと決して疑う」
 d. Luc doute que Marie vienne jamais le voir. (Muller 1984: 94)
 「リュックはマリーがまさか彼に会いに

来るとは思っていない」

このように、否定以外で否定極性項目を認可するのは、補文標識の持つ極性に関わる[neg]素性と考えられる。このような、節全体の極性を左右する素性を補文標識が持つことにより、否定作用域が節全体に及ぶことが可能になるのではないかと考えられる。le fait que 節では、節全体を一つの名詞句にまとめることから、補文標識 que が節全体の極性を決める素性を持つと思われる。つまり、否定極性文脈を持つ節にせよ、le fait que 節にせよ、これらの補文標識は節全体の極性を決める素性を持っており、そのことが、否定が節全体を作用域にとるのを可能にしているのではないかという仮説が立てられる。その極性を決める素性として [unvalued neg] を仮定した分析を以下では提案する。

4.3.2. 否定極性文脈を作る補文標識

否定作用域の拡張を許す補文があるから、それを可能にする素性を持つ補文があるという仮説を立てることは、場当たり的に見えるかもしれないが、その素性として採用する [unvalued neg] という素性は、ヘブライ語のデータ観察でも、日本語のデータ観察からも支持されるものである。[valued neg] は否定極性項目を認可し意味的貢献を行うのに対し、[unvalued neg] は否定極性項目を認可せず、完全に形式的な素性である。Landau(2002)は、否定的補文標識(negative complementizer)が持つ素性には、意味的価値を持つ(解釈可能な)[valued neg]だけでなく、意味的価値を持たない(解釈不可能な)[unvalued neg]も存在する仮説を提案し、ヘブライ語の否定的述語のとり補文標識の文制約を説明できることを示した。また、上林(2008)は、日本語に見られる否定極性文脈での否定作用域拡張現象が同仮説により説明されることを示した。

フランス語の否定極性文脈と le fait que 節において否定作用域が文全体に及ぶ解釈が可能になる現象も、[unvalued neg] を仮定するこ

とで次のように分析できる。

- (36) (i) 条件を表す si 節、疑問文・疑問節、驚きを表す述語がとる補文は、その補文標識に [(un)valued neg] を選択する。
 (ii) le fait que... の補文標識は、[valued neg] を持つことはないが、[unvalued neg] を持つことはある。
 (iii) [unvalued neg] を持つ補文標識は、否定辞上昇を引き起こし、否定作用域が文全体に及ぶ解釈が生じる。
 (iv) 否定極性文脈内補文では [valued neg] が選択される場合、また le fait que 補文では [neg] が選択されない場合、それぞれの場合において否定辞上昇は起こらず、否定作用域が文全体に及ばない解釈を与える。

つまり、条件を表す si 節、疑問文・疑問節、驚きを表す述語のとる補文では、補文標識が [valued neg] を持つ場合と、[unvalued neg] を持つ場合があり、後者の場合に否定作用域が拡張する解釈が可能になる。le fait que 節では、補文標識が [neg] を持たない場合と、[unvalued neg] を持つ場合があり、後者の場合に否定作用域が拡張する解釈が得られる。

(37) まとめ

- (i) 条件を表す si 節、疑問文・疑問節、驚きを表す述語のとる補文
 si des précautions ne sont pas prises
 A. [valued neg]
 [_{C[*vneg*]} si [*des précautions* [*ne sont pas prises*]]]¹⁹⁾
 ([_{C[*vneg*]} if [(some) precautions [not are NEG taken]]])
 B. [unvalued neg]
 [_{C[*unvneg*]} ne_i si [*des précautions* [*e_i sont pas prises*]]]
 ([_{C[*unvneg*]} not_i if [(some) precautions [*e_i are NEG taken*]]])

(ii) le fait que 節

- Le fait que des enfants ne réussissent pas
 A. —
 [le fait [_C que [*des enfants* [*ne réussissent pas*]]]
 ([the fact [_C that [(some) children [not succeed NEG]]])
 B. [unvalued neg]
 [le fait [_{C[*unvneg*]} ne_i que [*des enfants* [*e_i réussissent pas*]]]
 ([the fact [_{C[*unvneg*]} not_i that [(some) children [*e_i succeed NEG*]]])

[unvalued neg] が選択される場合にのみ ne の上昇が起こるのは、この移動が [unvalued neg] と否定辞 ne との素性照合 (feature checking) によって動機づけられているためである。素性照合は、LF で読み取れる表示を産出するように、解釈不可能 (uninterpretable) な素性を取り除くための操作であり、解釈可能な素性については素性照合の必要はないとされる (Chomsky 1995)。一方で、経済性の原理により、不必要な統語操作は排除されるので、[valued neg] 素性の照合は行われない。従って、補文標識が [valued neg] を持つ場合には、素性照合は行われず、否定辞上昇も起こらない。

否定極性文脈を作る節や le fait que 節において、[unvalued neg] という極性に関わる素性が選択されるのは、否定極性文脈の場合には、節に含まれる命題全体の極性を左右する素性を補文標識が持っていることに由来し、le fait que の場合には、節全体を一つの名詞句にまとめることから、補文標識 que が節全体の極性を決める素性を持つためであると考えられる。

5. おわりに

不定名詞句主語に否定が及ぶという報告例の少ない現象の事例を観察・考察し、「条件を表

す si 節、疑問文・疑問節、驚きを表す述語の
 とる補文と le fait que 節では、不定名詞句主
 語に否定が及ぶ解釈が可能になる」という一般
 化を導いた。また、日本語や英語のデータとの
 比較から、否定極性文脈を作る節を中心とした
 特定の節内において「否定作用域拡張」現象が
 観察されることに注目し、否定的意味に貢献し
 なくても、否定的意味に反応して何らかの働き
 かけを行う補文標識が存在するという先行研究
 で提案される仮説に基づく分析を提案した。

しかし、否定極性を持つ節全てに否定作用域
 拡張現象が観察されるわけではなく、また、本
 稿で取り上げた以外の節においても、この現象
 は観察される²⁰⁾。補文標識を選択する述語の
 意味の違いや補文が持つ文中で果たす役割と
 いった視点から、今後さらに否定が拡張する解
 釈が得られる言語環境を明らかにしていく必要
 がある。

¹ 出典：Encyclopédie Médicale Quillet, 1965 :
 276, Frantext

² 以下の例文は、Frantext かインターネット
 上でのデータ収集によるもので、ヒット件数の
 数が膨大になるので、総称文主語のヒット数が増える un(une)N は検索対象から外し、des N
 で検索した。従って、収集したデータは全て
 des N 主語文になるが、不定名詞句全般に適用
 できると考えている。ただし、部分冠詞を持つ
 名詞句については、主語位置への制限がさらに
 強いものと予想される。

³ 出典：P346/* / ARTS ET LITT. SOCIETE
 CONTEMP. / 1935 page 5012, Frantext.

⁴ 出典：LE MONDE | 21.04.05
 |http://www.lemonde.fr/societe/article/2005/04/21/un-revenu-de-solidarite-active-pour-favoriser-le-retour-a-l-emploi_641375_3224.html#ens_id=641510

⁵ 出典：David H. Walker 'Gide, les enfants et
 la loi', in Naomi Segal, Marc Allégret (ed.), *Le
 désir à l'oeuvre André Gide à Cambridge 1918,
 1998 Faux titre: André Gide à Cambridge 1918,
 1998*: Rodopi, 2000, p.318, <http://books.google>.

co.jp

⁶ 出典：[pedagogie.ac-montpellier.fr:8080/
 disciplines/svt/spip/IMG/doc/bilanECE2007_
 en_lettres.doc](http://pedagogie.ac-montpellier.fr:8080/disciplines/svt/spip/IMG/doc/bilanECE2007_en_lettres.doc)

⁷ 出典：R764/ PAGE.A / TCHAO PANTIN
 / 1982 page 94 / *Première partie, Bensoussan
 Story*, Frantext

⁸ 出典：Centre national de documentation pédagogique,
[www.cndp.fr/ecole/sciences/objectif_sciences/
 pdf/reflexions/enquete_OS_138-141.pdf](http://www.cndp.fr/ecole/sciences/objectif_sciences/pdf/reflexions/enquete_OS_138-141.pdf)

⁹ 根源的モダリティの文脈で用いられる否定
 文の不定名詞句主語も、存在解釈を持たない。
 例えば (i) において「偉大な狙撃手になるため
 には不可欠でない特殊な身体能力が一部ある」
 という存在解釈はないし、(ii) においても同様
 である。しかし、それは命題否定がかかるため
 であるというよりは、総称解釈されるためであ
 ると考えるべきであろう。

- (i) ... que des qualités physiques exceptionnelles
 ne sont pas indispensables à celui qui veut
 devenir un grand tireur;
 = Il n'y a pas de qualités physiques
 exceptionnelles qui soient indispensables.
 (ii) Des problèmes urbains moins urgents
 n'appellent plus une mesure des faits sociaux
 aussi précise qu'à l'époque antérieure.
 ? = Il n'y a plus de problèmes urbains
 moins urgents qui appellent une mesure
 des faits sociaux aussi précise.

des N は総称文の主語にはなりにくいことが知
 られているが、根源的モダリティの文脈では、
 総称文の主語になることができる。

- (iii) Des hommes forts peuvent soulever un
 piano. (Dobrovie-Sorin2002)
 (iv) Des agents de police ne se comportent
 pas ainsi dans une situation d'alarme.
 (Carlier 1989)

¹⁰ ただし、否定文そのものの以外の否定極性文
 脈で肯定極性項目が現れた場合には、否定極性
 項目を用いた場合と同じ解釈になる。

- (i) Je ne crois pas qu'il y ait parlé à quelqu'un.

= Je ne crois pas qu'il y ait parlé à qui que ce soit. (Muller 1991:102)

¹¹ 根源的モダリティの文脈では、quelqu'un 文においても総称解釈が生じ、それがquelqu'unの存在解釈が出ない原因となっていると思われる。Larrivée(2005)においても、総称解釈との関連の深さが指摘されている。

(i) Dans ces circonstances, quelqu'un ne peut pas clamer son innocence.

(cf. ?? Dans ces circonstances, quelqu'un n'a pas clamé son innocence.) (Larrivée 2005 : 283)

(ii) Quelqu'un ne peut pas dire 'j'ai reçu des ordres' quand il s'agit de condamner des gens et de faire ce qui s'est fait à cette période.

(iii) Quelqu'un qui ne veut pas pleurer ne pleure pas. (R. Ducharme 1990. *Lavalée des avalés*. Paris : Gallimard, p.90, in Larrivée 2005 : 289)

(iv) Quelqu'un ne pleure pas dans une église, voyons! (Larrivée 2005 : 292)

¹² フランス人インフォーマント二人の判断による。

¹³ Ducrot (1984 : 216-218)では、反論的否定はメタ言語否定と区別されるが、それより以前の分類では、反論的否定はメタ言語否定を含むものであった。反論的否定は、逆の意見に反対する否定で、相手に反論するのではなく単に状態を表す否定である叙事的否定と対立させられる。メタ言語否定は、否定対象となる文の前提を取り消すなど、論理的否定を行わない否定を指す。本稿で用いる「命題否定」「述語否定」「部分否定」は、否定作用域に基づく分類であり、否定の機能の違いに基づくDucrotの否定の分類とは、視点の異なる分類方法である。

¹⁴ 単文における否定作用域拡張を引き起こすメタ言語否定が可能になるためには、「対比」の文脈だけでは不十分であることがHorn(2001 :497)において指摘されている。

¹⁵ 出典 : <http://www.tierslivre.net/litt/baudelphotog.html>

¹⁶ 出典 : Jocelyn Benoist, Sandra Laugier, *Langage ordinaire et métaphysique: Strawson* (p47), Vrin, 2005. <http://books.google.co.jp/>

¹⁷ 出典 : <http://www.liberaux.org/index.php?s=dbb8a096610cd22df0b839f2070de8b4&showtopic=31452&st=40&p=279775&#entry279775>

¹⁸ 出典 : <http://www.comlive.net/Medecine-Temoignages,142152.htm>

¹⁹ 否定文の統語構造は、Pollock(1989)で提案されたものを想定している。

²⁰ 次のような例が指摘されている。本稿の提案に拠るなら、le fait queと同様の分析が適用される。

(i) J'espère que quelqu'un ne nous a pas vus. (Attal 1979, in Muller 1991 : 338) (= que personne ne nous a vus)

(ii) Je peux t'affirmer que quelqu'un n'est pas venu. (Attal 1979, in Muller 1984 : 86, 1991 : 338) (= que personne n'est venu)

(iii) Je suis sûr de n'avoir pas endommagé quelque chose. (= de n'avoir rien endommagé) (Attal 1979, in Muller 1984 : 86)

参考文献

Attal, Pierre 1979. *Négation et quantificateurs*. Thèse de doctorat (Paris-VIII).

Attal, Pierre 1994. *Questions de sémantique: une approche comportementaliste du langage*. Louvain-Paris: Édition Peeters

Baker, C. L. 1970. Double Negatives. *Linguistic Inquiry*, 1-2, 169-186.

Bosveld-de Smet, L. 1997. *On Mass and Plural Quantification: The Case of French des/du-NPs*. Groningen : University Press.

Carlier, Anne 2005. L'argument davidsonien: un critère de distinction entre les prédicats «stage level» est les prédicats «individual level». *Travaux de Linguistique* 50, 13-35.

Chomsky, Noam 1995. *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, MA.

Danon-Boileau, Laurent 1989. La détermination du sujet. *Langages* 94, 39-72.

- Dobrovie-Sorin, Carmen 2002. G n ricit  et distributivit  des ind finis pluriels, in ms. *Colloque Ind finis et pr dications en fran ais*, October 3-5, 2002, Universit  de Paris-Sorbonne, Paris.
- Ducrot, Oswald. 1973. *La preuve et le dire*. Paris : Mame.
- Ducrot, Oswald. 1984. *Le dire et le dit*. Paris:  dition de Minuit.
- Hasegawa, Nobuko 1991. Affirmative polarity items and negation in Japanese, in C. Gerogopoulos and R. Ishihara (eds.), *Interdisciplinary Approaches to Language, Essays in Honor of S.-Y. Kuroda* (pp. 271-286). Kluwer: Dodrecht.
- Horn, Laurence. R. 2001. *A natural history of negation*. Chicago: University of Chicago Press. (Originally published: Chicago: University of Chicago Press, 1989).
- Kato, Yasuhiko. (2000). Interpretive asymmetries of negation, in L. R. Horn & Y. Kato (eds.), *Negation and polarity: syntactic and semantic perspectives* (pp. 62-87). Oxford: Oxford University Press.
- Laka, Itziar 1990. *Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Landau, Idan 2002. (Un)interpretable Neg in Comp. *Linguistic Inquiry* 33: 465-492.
- Larriv e, Pierre 2005. Quelqu'un n'est pas venu. *Journal of French Language Studies* 15, 289-296.
- Larriv e, Pierre 2006. Conditions d'interpr tation, termes   polarit  n gative sujets et groupes verbaux n gatifs, in Corblin, Fran is, Sylvie Ferrando et Lucien Kupferman (dirs.), *Ind fini et pr dication* (pp.205-216). Paris: Presses de l'Universit  Paris-Sorbonne.
- Muller, Claude 1984. L'association n gative. *Langue fran aise*, 62, 59-94.
- Muller, Claude 1991. *La n gation en fran ais*. Gen ve: Librairie Droz.
- Pollock, Jean-Yves 1989. Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry*, 20, 635-424.
- 今仁生美 (1993) 「否定量化文を前件に持つ条件文について」益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』、pp. 203-222、くろしお出版。
- 上林航 (2008) 「日本語の反意的述語のとり補文の性質」、関西言語学会第 33 回大会、於大阪松蔭女子大学、2008 年 6 月 8 日。